

『CROWN English Communication I New Edition』 —果敢なる挑戦のために—



『CROWN』シリーズ代表著者
慶應義塾大学 霜崎 實

1. はじめに

平成21年(2009年)の学習指導要領の改定を受けて、現行版の『CROWN English Communication I』が発行されたのが、平成25年(2013年)の3月のことである。早いもので、高等学校の教室で実際にこの教科書が使われて、3年余りの月日が経ったことになる。

その間、現場の先生方からは多くの貴重なフィードバックを頂戴し、それを受けて編集委員会での密度の濃い議論が行われ、膨大な執筆・編集作業の果てに、この度、『CROWN English Communication I』の改訂版が完成するに至った。

今回の改訂版は同じ学習指導要領のもとに編纂されたものであるが、現行版の良さは十分に尊重しつつ、一方、現行版の使いにくい点については改善を加えることで、より進化した教科書に生まれ変わることができたものと確信している。本誌の2014年夏号の拙稿では、クラウン・シリーズを振り返って「もう一步先に行く教科書を目指して」という副題を付したが、今回は、「さらにもう一步先に行く教科書を目指して」という副題が相応しいかもしれない。

さて、前置きはこのくらいにして、以下、今回の改訂のポイントを解説すると同時に、新しくなった教科書の活用の仕方についても適宜ご紹介することにしたい。

2. 改訂の基本方針

第1の改訂のポイントは、題材の大幅な刷新である。現在では、クラウンの<題材中心主義>という考え方が浸透しており、その中で、クラウンらしさを具現化しているようなレッスンについては今回も継続使用としたが、一方では、大胆な刷新を行うことによって、時代の一步先に行く教科書づくりを目

指すことにした。具体的には、題材の多様性を確保しつつ、本課10レッスンのうち4レッスンの題材の差し替えを行い、加えて、Reading (1) & (2)、Optional Lessonについては全面的に差し替えることとした。すべてを合わせると13の題材のうち、7つの題材が差し替えとなっているので、大幅な改訂といってもよい。

第2の改訂のポイントは、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような題材を厳選し、それをもとにさまざまなコミュニケーション活動を組み込むこととした。いわば4技能が有機的な関係を持ち、それぞれが相乗効果をもたらすようなレッスン構成を目指した。結果として、後に詳述するように、現行版のActivitiesを廃止して新たにYour Reactionを設けることで、本課での内容理解をもとに、コミュニケーション活動を通じて生徒自らが自分の考えを構築していけるような場を提供することができた。

第3の改訂のポイントは、学習指導要領の要請にしたがって、「質量面での格段の充実」を追求することである。以前の教科書観では、「教科書を教える」という考え方が当然視されていたが、現在では「教科書で教える」という考え方にシフトしている。つまり、教科書にあるから教えるのではなく、教科書にある題材を、現場のニーズにしたがって選択的に扱うことが教師に求められているのである。したがって、教科書編纂においても、そうしたニーズに応えるべく、読む価値のある教材をオプションとして用意しておく必要がある。そのための一つの方策として、現行版に引き続いて今回の改訂版においても、各レッスンにOptional Readingを用意することにした。

第4の改訂のポイントは、指示文などの英語化である。現行版では、指示文は日本語で提示することを原則としていたが、今回の改訂では、それを英語

に改めることにした。学習指導要領の浸透に伴い、英語での授業活動が一般的になりつつある現状に鑑みて、指示文が英語で提示されていたほうが、活動をより円滑に進めることができるだろうという判断である。また、本課の傍注で慣用表現を取り上げるようにしたが、ここでもできるだけ日本語を使わずに、英語によるパラフレーズを行うようにした。

次に、より具体的に、題材内容とレッスン構成について話を進めていくことにしたい。

3. 多様性に富んだ題材

『CROWN English Series』では、常に題材の多様性と新鮮さを追求することを原則としてきたが、今回の改訂にあたって、一貫して、この原則に沿った題材選択を行っている。本課で取り上げたテーマは、言語・科学・生き方・伝統文化・音楽・格差社会・環境問題・動物の知性・建築・ボランティア活動・平和・ポップカルチャーなど、きわめて多岐にわたっており、『CROWN English Series』ならではの学びの機会を提供することができたと自負している。以下、具体的に各レッスンで取り上げたテーマとその概要を示すが、今回のラインアップが知的好奇心に富んだ高校生にとって、英語を通じて知性と感性を

磨く絶好の機会となるものと確信している。

本課は合計10レッスンから構成されている。そのうち星印(★)を付した4レッスンが今回新たに導入されたもので、残りの6レッスンについては、現場からの要望もあり、現行版からの継続レッスンとした。ただし、星印(☆)を付したL. 2 “Going into Space”、およびL. 4 “Seeing with the Eyes of the Heart” (タイトルも“Playing by Ear”より変更)については、一部修正を加えることで、内容を時代に即したものにした。

また、Reading 教材2編は、全面的に差し替えて、“Homework”と“Love Potion”を取り上げた。ともにユーモアに富んだ作品である。読むことで自然に笑いが出るようになれば、英語がそれだけ好きになってくれるに違いないという期待を込めて、生徒が読んで楽しめる素材を選択した。

Optional Lesson (選択教材)についても差し替えを行い、改訂版では“Heroic Losers”を新たに導入した。2020年には東京での夏季オリンピックの開催が決定しているが、このレッスンではそうした時代の流れを捉えて、実際にあった2つのエピソードを紹介することで、オリンピック精神について考えるものとした。

『CROWN English Communication I New Edition』の題材：テーマと概要

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1 ★	When Words Won't Work	【言語・(日本)文化】グローバル化が進む現代において、ピクトグラム(絵文字)による情報伝達の可能性・重要性について考える。
Lesson 2 ☆	Going into Space	【科学・生き方】若田光一氏が国際宇宙ステーションでの活動経験や宇宙開発の意味について語る。
Lesson 3 ★	A Canoe Is an Island	【伝統文化・共生】<ホクレア号>の乗組員として、伝統航海術によって太平洋を航海した内野加奈子氏の体験に学ぶ。
Lesson 4 ☆	Seeing with the Eyes of the Heart	【音楽・若者の生き方】ピアニストとして活躍する辻井伸行氏の体験を通じて、音楽による感動について考える。
Lesson 5	Food Bank	【格差社会・NPO】貧困に苦しむ人々に食料が行きわたる仕組みを作ったチャールズ・マクジルトン氏の活動を紹介する。
Reading 1 ★	Homework	【ユーモア】快適な生活をエンジョイできる近未来を舞台とするショート・ショート。それでも子供には子供なりの悩みがあるようだ。
Lesson 6	Roots & Shoots	【環境教育・動物】ジェーン・グドール氏がチンパンジーの習性・人間との類似性・環境教育について語る。
Lesson 7 ★	Paper Architect	【建築・ボランティア】被災地での支援活動に積極的に携わってきた建築家坂茂氏の体験を通じて、建築家の役割について考える。
Lesson 8	Not So Long Ago	【平和・歴史】20世紀を写真で振り返りつつ、戦争と平和について考える。
Lesson 9 ★	Crossing the “Uncanny Valley”	【科学技術・人間理解】人型ロボット、アンドロイドの制作に携わる石黒浩氏の研究を通じて、ロボット工学の現在を紹介する。
Lesson 10	Good Ol' Charlie Brown	【生き方・価値観】チャールズ・シュルツ氏の作品『ピーナッツ』を通じて、生きるうえで何が大切かを考える。
Reading 2 ★	Love Potion	【ユーモア】気になる男の子の気を引くために、少女が相談したのは、「魔女」である祖母。どんなアドバイスをもらったのか。
Optional Lesson ★	Heroic Losers	【スポーツ】メダル獲得が目されるオリンピックだが、負けても記憶に残る選手がいる。ここでは、オリンピック精神について考える。



4. 各レッスンの構成

ここでは、各レッスンの構成について解説する。

4.1 Pre-reading 活動

タイトルページでは、本文のテーマを端的に表現したエピグラフを用意した。エピグラフの性質上、やや内容的に難しいものや抽象的なものも含まれてはいるが、いずれも含蓄に富んだものである。レッスンに入る前に、どのような意味合いなのかを考えさせるのも一案である。あるいは、本文の学習を一通り終えた段階で、本文との関連性について生徒にディスカッションさせてみるのもよい。

さらに、Pre-reading 活動として、Take a Moment to Think を設けた。レッスン内容に関連した英語の問いを3つ提示している。生徒の背景知識を活性化させることを目的とした質問であるから、本課への導入を英語で行う際に活用していただきたい。

4.2 Reading 活動

本文は650語程度から850語程度の英文で、各セクションは原則として見開き2ページ、4セクションから構成されている(ただし、§1は左ページがタイトルページとなっているので、本文は1ページ構成である)。

傍注で慣用表現とそのパラフレーズを取り上げ、例文が必要な場合は脚注で提示した。また、本文の内容理解を確認するための簡単な英語の設問(Q&A)を設けているので、授業での活動に活用していただきたい。さらに、各セクションの末尾には、リスニングによる内容理解の質問(T-F)も用意した。

4.3 Post-reading 活動

Post-reading 活動は、(1) Comprehension、(2) Your Reaction、(3) Grammar、(4) Exercises、(5) Optional Reading と続く。

(1) Comprehension

まず、Comprehension の Check においては、multiple choice 形式の内容把握問題を3問用意した。作成にあたっては、瑣末な問題は極力排し、内容の骨子や重要な情報を問う問題に絞った。

続いて穴埋め形式の Summary を用意した。要約することで、本文の全体像を俯瞰する能力を養うこ

とを目的としたものである。しかし、単に穴埋めすることで要約活動が完結する、と考えているわけではない。授業では教科書の Summary から離れて、まず生徒に独自に英文の要約を作成させるのも一案である。その上で教科書の要約問題に取り組み、後に両者を比較検討させることで要約のコツを掴ませる、といった工夫も考えられよう。

現行版では本文の末尾に配置していた Food for Thought を、改訂版では Comprehension の末尾に移動した。このコーナーは、現行版で初めて導入したものであるが、もともと OECD による国際学習到達度調査(PISA)における「読解力」を意識したもので、生徒が情報を取り出し、解釈し、自らの体験を踏まえて英文内容を理解することを目的としたものである。もちろん、「英語 I」の段階で高度なものを要求しているわけではない。今回の改訂を契機に指示文は原則として英語としたが、Food for Thought は例外とし、日本語での質問に対して、日本語で答えることを想定している。英語の教科書であっても、より深い理解に到達することを目指しているため、あえて日本語での指示文とした所以である。

(2) Your Reaction

Your Reaction は、今回、全面的な改訂を行った。このセクションは、本文の内容の理解を前提として、聴く活動(listening)、話す活動(speaking)、書く活動(writing)などのコミュニケーション活動を通じて、自分の考えを構築することを目的としたもので、4つのパートから構成される。

まず、Agree or Disagree では、本文での主張(意見)に関して、ある意見が表明される。たとえば、L. 2 “Going into Space” では、There is no reason to send people into space. We should spend the money to help poor people. という意見が表明されており、これについて、agree、disagree、cannot decide の中から、自分の立場に近いものを選択する。さらに、Why? という質問が続くので、自分がなぜそのような立場を選択したのか、その理由を英語で書いてみる。生徒は自分の考えを直観的にまとめるだけであるから、いわば準備活動のようなものである。

次に、Let's listen to the dialog に進む。ここでは、Mei と Jerry の二人のダイアログを聴いて、リスニングによる内容理解を試みる。ダイアログの内容は、Agree or Disagree での意見に関するもので、意見を

異にする Mei と Jerry が議論を展開している。スクリプトは教科書の巻末に掲載しておいたが、生徒にはあらかじめスクリプトを見せることなく、リスニングから入るようにしたい。ダイアログで使われている新語や慣用表現については教科書に挙げておいたので、適宜参照するとよいだろう。何度か反復してリスニングの練習をしたあとで、必要に応じて巻末のスクリプトを確認し、内容の理解を確かめる。生徒には、Mei と Jerry の会話から、意見表明の仕方や反論の仕方などを学ぶことを期待している。

さて、Agree or Disagree およびダイアログのリスニングを踏まえて、次の Let's write about it の段階に進む。ここで生徒は直観的な意見表明から一歩進んで、ダイアログでの議論も踏まえて、自分の意見を英文でまとめる作業を行う。その際、教科書に提示されているサンプルを参考にしてもよい。時間的な余裕があれば、これを受けて、グループ・ディスカッションの時間を設けることも考えられる。それぞれが自分の立場表明をしつつ、他のメンバーからの質問や反論に答えることで、英語での生きたコミュニケーション活動を体験することができるだろう。

最後に、Anything more to say? で、3つの設問が提示されている。これは、宿題として自分の好きな設問を選択して、短いエッセイを書いてこさせるために活用することもできるだろうし、また、生徒の関心とレベルを考慮しつつ、ディスカッションのテーマとして活用することも可能だろう。

(3) Grammar

Grammar では、そのレッスンで導入されている文法項目を2～3点取り上げ、簡単な解説と例文を提示した。また、現行版で採用した<文法コラム>は好評であったので、今回の改訂においても継続することとした。このコラムは、生徒が疑問を抱くようなポイントを取り上げて解説を施したもののだが、文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが重要であるという認識に基づいたものである。さらに、学んだ文法項目を活用して、生徒が自分の体験などについて述べる練習をするための問題もページ下に用意したので、こちらもぜひ活用していただきたい。

(4) Exercises

Exercises では、Grammar で学んだ文法項目の理解を確認し、表現活動に結びつける訓練をするため

の練習問題を用意した。さまざまなバリエーションの問題に取り組むことで、生徒の文法理解を確かなものとするために活用していただきたい。

(5) Optional Reading

Optional Reading では、本文のテーマに関連した内容を扱った300語から350語程度の英文を取り上げた。本文の内容を、別の角度から扱ったものや、発展的内容を扱ったものなど、本文の内容をより深く理解する助けとなるはずである。比較的詳しい脚注を施したので、ある程度の英語力があれば、辞書の助けがなくても通読することができるものと思われる。ただし、Optional Reading は発展的な学習内容を含むもので、必ずしも全ての学校で扱うことは想定されていない。学習指導要領で明記されているように、自学自習用の教材としての活用もお考えいただきたい。

5. おわりに

以上、『CROWN English Communication I New Edition』の編集方針と概要について述べてきた。

考えてみるに、教科書はいわば現場に提供された「実験道具」のようなものかもしれない。教科書は「成功の処方箋」ではない。教育の現場において、失敗を恐れずに、新たな試みに挑戦するための実験道具である。クラウン編集委員会としては、実験道具が有効に活用されることによって(あるいは、編集委員会が想定していなかったような独創的な方法で活用されることによって)、英語教育の現場が活性化し、生徒の英語コミュニケーション能力の養成に役立つことを切に望んでいる。

これまでも現場からの実践報告(あるいは「実験報告」と言うべきものか?)を頂戴しているが、今後とも引き続き、ぜひ現場からの報告をお寄せいただければ幸いである。現場での一人一人の「実験」が新たな英語教育の可能性を拓く一歩となるものと確信する。その意味では、「さらにもう一歩先に行く教科書」を実現するためには、そうした「実験」に果敢に挑戦していただけるような現場の先生方の勇気と創意工夫が不可欠である。そのための「実験道具」として、『CROWN English Communication I New Edition』が活用されることを念じてやまない。